

(1) 天寧寺祖霊社と井伊直弼顕彰の建碑運動

みずたに たかのぶ
水谷 孝信

天寧寺の祖霊社は、江戸後期に14代藩主井伊直中が建立して自身の神像を置いた護国殿が明治になって転換したもので、神仏分離をその理由とする理解が一般的であるがその経緯は必ずしも明らかにされていない。この天寧寺祖霊社では直中とともに実子で16代藩主であった直弼が祀られたが、昭和5年（1930）の百回忌を最後に直中の「五月祭」が執行されなくなり、直弼の「三月祭」だけが続けられた。このことから明治の祖霊社転換は神仏分離ではなく、主に直弼の神霊を「衆庶参拝」の対象として祀ることを目的にした措置であったと考えられる。その意味で明治の井伊直弼顕彰運動の出発点とも位置付けられる。

本稿は、この天寧寺祖霊社の成立の経緯を検討し、その後に展開した井伊直弼顕彰運動の典型であった記念碑・銅像建設運動（建碑運動）について諸資料から再検討を試みた。建碑運動は、旧彦根藩士を中心に進められた横浜と彦根の大老の銅像建設についていくつもの研究業績が重ねられてきた。そこでは旧藩士・建碑委員の活動とそれに対する政府の長州閥との軋轢などが論じられ、新旧の『市史』からはもっぱら旧藩士側の「正義」が語られている印象を受ける。

しかしながら直弼顕彰の動きは旧彦根藩勢力の専売特許ではなく、明治10年代、20年代には旧幕臣の運動や神戸、横浜の実業家たちの建碑運動も実在した。さらに明治期後半の建碑運動の背景には旧藩顕彰に止まらない、近代日本の国家意識や国民意識の広汎な高揚があり、明治30年代の東京日比谷公園での建碑計画は旧彦根藩士ではなく、島田三郎ら衆議院議員グループがその中心となっている。この計画は法改正で頓挫したものの、その後の旧藩士・建碑委員の横浜での活動の契機となった。そして日露戦争の勝利は人々の「一等国」と「もはや官軍も賊軍もない」国民統合の意識を増幅させ、明治政府から違勅や尊

攘派弾圧の罪を問われる大老の銅像建設が横浜と彦根で実現する追い風となったのである。

しかしそれは大老の国家的な名誉回復でも復権でもなく、国が求める忠臣像・国民精神と大老顕彰との齟齬はその後も解消されることはなかった。とりわけ彦根では大老と旧彦根藩の名誉は「彦根人」自身の存在証明でもあったため、旧藩勢力側に妥協や歩み寄りの余地は全くなかったと考えられる。ただ大老の銅像建設を推した「官賊不問」の広汎な統合意識を考えれば、こうした「臣民」意識の国家・中央と地方のズレは彦根に限らず各地に存在したことが推察され、その検証が課題となる。



(写真1) 大阪・兵庫・神戸の実業家たちによる「故井伊直弼公記念碑建設趣意広告」彦根藩大久保家文書（個人蔵）

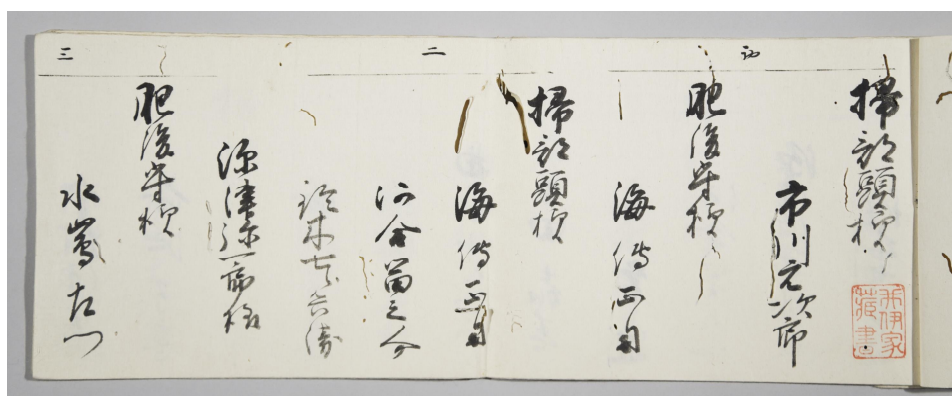
(2) 研究ノート 井伊家における蹴鞠—「蹴鞠座組帳」および「蹴鞠座次」を中心に—
茨木 恵美

本稿は、従来紹介される機会の乏しかった井伊家における蹴鞠について、井伊家に伝来した「蹴鞠座組帳」(2冊、当館蔵)および「蹴鞠座次」(1冊、当館蔵)を中心に概観したものである。蹴鞠は、複数の参加者が鞠を落とさないように交互に蹴り続ける球技である。中国に起源を持ち、日本では奈良から平安時代に貴族を中心に発展し、やがて武家にも広がり、さらに江戸時代には富農や富商を中心に庶民層にも普及した。

「蹴鞠座組帳」「蹴鞠座次」は、彦根藩井伊家で催された3回の鞠会について、参加者やプレーの際の立ち位置などを記録した資料である。これらの鞠会は江戸で催されたもので、主催者は井伊家11代直中(1766~1831)と考えられる。直中は、蹴鞠道の家元である飛鳥井家から、特別な蹴鞠装束である紅葛袴くれなゐのくずばかまの着用を武家として初めて許されるなど、井伊家の中でもとりわけ熱心に蹴鞠に取り組んだ人物であった。その子直亮(後の12代当主)も幼少ながら2回の鞠会に参加している。参加者には、会津藩主松平容頌まつだいらかたのぶや白河藩主松平定信まつだいらさだのぶ、久留米藩主有馬頼貴ありまよりたかといった、井伊家と同じ溜詰たまりづめあるいは姻戚関係にある大名に加え、旗本、各藩の藩士、坊主衆、飛鳥井家の門弟である町人も確認され、身分を超えて一堂に集い、プレーしていたことが分かる。

また、直中による蹴鞠愛好は周囲にも影響を与えていた。直亮がごく幼い頃から飛鳥井家に入門して蹴鞠を学んでいた他、直中の弟の中にも蹴鞠を嗜む者がいたことが、井伊家伝来の蹴鞠関係資料から確認される。また、御殿の絵図からは、当時、彦根城表御殿や松原下屋敷、江戸上屋敷には鞠場が設けられていたことが判明する。この内、表御殿の鞠場は屋根や天窓を持つものであった。

以上のように、直中が当主であった時代、井伊家では蹴鞠が盛んに行われていた。「蹴鞠座組帳」「蹴鞠座次」は、その実態を具体的に知ることが出来る貴重な資料であるとともに、大名同士の交流を物語る資料としても注目されるものといえる。



(写真2)「蹴鞠座組帳」彦根城博物館蔵(井伊家伝来典籍)

(3) 資料紹介 「御入部御覧留」—彦根藩足軽の基礎資料—

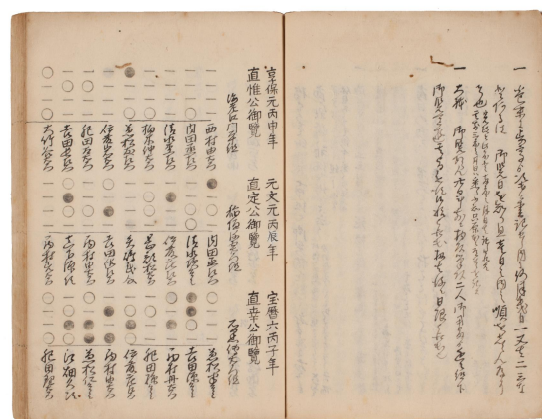
きたの ともや
北野 智也

本稿は、弓術師範の家柄であった彦根藩士の増嶋高実が文化10年（1813）にまとめた資料「御入部御覧留」（令和3年度 当館購入）を紹介するものである。本資料は、井伊家7代直惟から12代直亮までの歴代当主（国入りしなかった9代直禎を除く）が藩主として初めて国入り（入部）するのに際して上覧した、藩士や足軽による武芸稽古の記録を、上・下の2冊にまとめたものである。各人の稽古の結果など、得られる情報は多分にあるが、本稿では、彦根藩の足軽の組織構造を解明する上での基礎情報を提供するという観点から、本資料に見出される足軽構成員の一覧的性格を中心に内容を紹介した。

彦根藩の足軽は、井伊家の知行加増に伴って増員され、江戸時代を通じて1120人を上限とし、弓組6組と鉄砲組31組に編成された。足軽にとってこの武芸稽古は、新藩主に御目にかかる初めての機会であり、原則全員が参加しなければならない重要なものであった。本資料には稽古に参加した足軽の名前や所属する組をはじめ、参加しなかった足軽についても名前や不参加の理由（病気や江戸に出張中である等）が記されている。これにより、享保元年（1716、7代直惟の入部年）、元文元年（1736、8代直定の入部年）、宝暦6年（1756、10代直幸の入部年）、寛政2年（1790、11代直中入部年）、文化9年（12代直亮の入部年）における足軽構成員の全体を把握することができる。これまで彦根藩の足軽の全体把握は、天明元年（1781）までしか遡ることができなかったが、本資料によりさらに半世紀余り遡ることが可能となった。

また、本資料からうかがえる足軽構成員の名前や所属する組などを整理した一覧表を基に、各組の足軽の人数や稽古に参加できない理由などを分析したところ、当時、彦根藩の足軽組織は常に総数の数%程度が欠員となっていたこと、78人から104人の足軽が江戸に詰めたことなどが把握できた。こうした状況は、これまでの研究においても想定はされていたものの、本資料によりその実態が具体的に明らかとなったといえる。

「御入部御覧留」は本稿で紹介した点以外にも多くの情報を有している。さらなる丹念な分析に加え、他の資料とあわせて検討を加えることで、さらに研究を進展させることが期待される。



(写真3)「御入部御覧留 上」(当館蔵)

(4) 資料紹介 個人所蔵「湖東焼 色絵盆栽に花卉蟹図鉢 鳴鳳絵付」

おくだ あきこ
奥田 晶子

湖東焼は、江戸時代後期から明治時代に近江国彦根で焼かれたやきものである。文政12年（1829）、彦根城下の商人絹屋半兵衛らが創始し、後に彦根藩の藩窯となって隆盛した。

本稿で紹介するのは、彦根市内の旧家に伝来した湖東焼の作品である。本品は、湖東焼きっての名絵付師として知られる鳴鳳の新出作品であり、これまで知られている鳴鳳作品に無い特色を持つものである。本稿では、本品の技法と表現の特徴について論じ、鳴鳳作品における位置付けを行った。

本作は色絵の技法で絵付が施されている。見込中央に芙蓉の折枝、外側に盆栽と蟹、百合と薔薇、菊の折枝が描かれる。盆栽鉢や蟹は陶磁器の意匠としては珍しく、鳴鳳作品の中でも他に例を見ない。

本品は、絵付の描線が明快かつ細密である。実物に即した写生的な表現で描かれており、生き生きとした雰囲気満ちている。陶磁器の意匠の多くが定型的な山水や花鳥風月、幾何学模様であった江戸時代後期の当時において、本作のような表現は希少である。制作当時、鳴鳳がこの鉢に描いた模様は、伝統的な型にはまらない、新鮮味のあるものとして受け止められたと考えられる。

本品は、上絵付の技法で彩色され、赤、黄、緑をはじめとする8色が用いられている。色数の多さに加え、釉薬そのものの質感が多様である点も注目される。盛り上げるように厚みを持たせた部分があれば、水彩画のように透明な色を薄く重ねてグラデーションで表現している部分もある。不透明な黒い線ではっきりと線描し、その内側に色釉を厚く塗り込んで表現している部分もある。注目すべきは、銀を蒔いたような質感を出したり、素地を削ったりして下地を加工する表現である。このような表現は少なくとも江戸時代までの日本の陶磁器では他に例を見ず、実験的な試みである。なおこれらの色絵技法は、江戸時代後期に中国から日本に新たにもたらされた粉彩技法に倣った表現となっている点も注目される。

以上のように、本品は江戸時代後期という時代において新奇性の高い表現技法が試みられており、湖東焼における表現活動の特徴の一端を示す作品として注目される。



(写真4) 湖東焼色絵盆栽に花卉蟹図鉢
見込部分 (個人蔵)



(写真5) 同 側面部分

(5) 資料翻刻 い い なおあき 井伊直亮筆「らくらくてい ぎ ゆうみぶくろ楽々亭座右耳袋」(下)

たか き ふみ え
高木 文恵
きた の とも や
北野 智也

本稿は、令和6年度発行の『彦根城博物館研究紀要』第35号に引き続き、彦根藩主井伊家に伝来し、現在彦根城博物館が所蔵する井伊家伝来典籍のうち、「楽々亭座右耳袋」を翻刻したものである。第36号では、本紙全100丁のうち、後半にあたる第66丁裏から第100丁裏までを翻刻した。

同書は、彦根藩井伊家12代直亮(1794-1850)が、人から聞き及んだ話で興味を覚えたものを書き記した随筆。直亮は、雅楽器や刀剣をはじめ、書画、典籍、時計、茶道具、古物等々、多彩で膨大なコレクションを形成した大名として世に知られる。知的好奇心も旺盛で、種々の情報を積極的に入手し、それらを記録することを厭わないところがある。

本随筆集の発案および命名は、幕臣根岸鎮衛(1737-1815)の随筆集「ね ぎしやすもり みみぶくろ耳囊(袋)」の影響とみられる。題名に「耳袋」の語を含み、各項目を「～事」とするなど、体裁や書きぶりを踏襲していることが確認できるためである。楽々亭とは、直亮の号のひとつ。

本書が取り上げる事項は、分野別や時系列ではなく、無作為のように見受けられる。執筆時期については、記事の内容から、弘化2年2月(1845)に起筆、筆を置いたのは嘉永元年(1848)が上限と判断される。

本資料の翻刻により、井伊直亮がどのようなことに関心を示していたのか、また、その情報の入手先はどういった人物だったのかが明らかになる。現代ではほとんど伝わっていない彦根藩領内の様子や家臣の家の伝統等の記事もあり、公的記録には残りにくい地域の歴史を知る格好の資料にもなり得る。

【収録内容の一部】

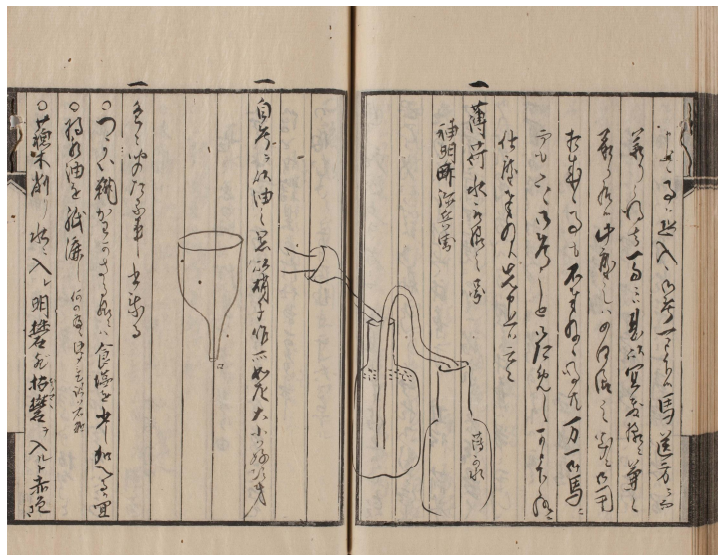
(家臣の家の) 薬の原材料および配合
(家臣の家の) 七夕祭
石造の法
蘭方目洗薬法
彦根北野寺
丹鶴叢書(書物)の廻状
(井伊家の) 中將の官位と姓名等の書法
11代將軍家斉の正室・広台院の和歌
薄荷水取様之図
嘉永元年(1848)の諸国の作割
隠居後の参府の御礼登城
牛肉主治・禁忌の事
毛生薬の事
遠州中泉村の味噌(味よろしき故尋ねさせ候)

【情報入手元の一部】

家臣達(藩医を含む)
典薬寮医師 高柴經由
大魏公(井伊家10代直幸)時分の書付か
三条家の諸大夫 森寺長門守
箒箆の師(京都の楽人) 安倍季良
鉄砲鍛冶 国友藤兵衛
幕府御時計師 金田市兵衛



(写真6) 「楽々亭座右耳袋」表紙



(写真7) 同 本文